

ダニエルの「七十週の預言」に関する「シャローム解釈」の学術的分析

第1部：「シャローム解釈」の解体と学術的展望

1.1. 中心命題：「シャローム解釈」の解説

ダニエル書9章24-27節に記された「七十週の預言」は、聖書解釈学において最も複雑で議論の多い箇所の一つである。数多の解釈が存在する中で、提示された資料1は、「シャローム解釈」と呼称しうる独自の包括的な視点を提示している。この解釈は、三つの核心的な主張に基づいている。

第一の主張：「七週」を共同体回復の期間と見なす

この解釈によれば、預言の冒頭に登場する「七週」（49年間）は、単なる年代表の開始点やメシア到来までのカウントダウンではない。むしろ、バビロン捕囚によって破壊されたユダヤ人共同体の全体的な健全性、すなわち「シャローム」（平和、完全性、繁栄）が回復される歴史的期間そのものを指すとされる。この期間は、物理的な城壁の再建に留まらず、霊的、社会的、政治的な秩序の再構築を含む1。

第二の主張：「油注がれた者」を集合的な職務と見なす

「油注がれた者、君主」（ヘブライ語: מָשִׁיחַ נָגִיד, mashiach nagid）は、特定の個人、特に終末論的なメシアを指すのではなく、捕囚帰還後の共同体を指導した一連の指導者層を集合的に指す言葉として解釈される。具体的には、総督ゼルバベルや大祭司ヨシュアに始まり、彼らに続く祭司や総督といった、文字通り油を注がれて聖別された職務に就いた指導者たち全体を指す1。この解釈は、ヘブライ語の「来る」（בוא, bo）という動詞が、特定の時点での到来だけでなく、ある状態の出現や存在の期間を示唆するという言語学的分析に基づいている1。

第三の主張：「断絶」をアロンの祭司職の終焉と見なす

預言の後半で述べられる「油注がれた者が断たれる」（יִקָּרֵט מָשִׁיחַ, yikaret mashiach）という句は、個人の死ではなく、油注ぎの制度そのもの、すなわちアロン系統の祭司職とそれに伴う神殿祭儀システム全体の歴史的・機能的終焉を指すとされる。この「断絶」は、紀元70年のローマ軍による第二神殿破壊によって決定的かつ物理的に成就したと結論づける。この主張の最も重要な textual evidence（本文証拠）として、七十人訳聖書（LXX）がこの箇所で「油注がれた者」（χριστός, Christos）ではなく「油注ぎ」（χρίσμα, chrisma）という言葉を用いている点が挙げられる。これは個人の不在ではなく、油注ぎという儀式・職務そのものの消滅を示唆していると論じられる1。

1.2. 広範な文脈：ダニエル書9章の主要な解釈学的枠組み

「シャローム解釈」の学術的地位を評価するためには、まずダニエル書9章を巡る主要な解釈学的潮流を理解する必要がある。

未来主義的（ディスペンセーション主義）解釈

この解釈は、預言が主に未来の終末時代に関する出来事を指し示していると考える。69週（483年）はキリストの初臨で終わり、その後、教会時代と呼ばれる期間の「間隙」または「挿入句」が存在すると主張する。そして、最後の「第七十週」は、未来に起こる7年間の患難時代であり、反キリストが登場してイスラエルと契約を結び、後にそれを破るとされる2。この見解は、「シャローム解釈」が提示する歴史的成就モデルとは根本的に対立する。

歴史批評的（マカバイ時代）解釈

多くの現代の批評的学者が支持するこの解釈は、この預言が大部分において vaticinium ex eventu（事後預言）であると見なす。つまり、紀元前167年から164年頃のマカバイ時代に書かれ、過去の出来事を預言の形で記述しているとする。「断たれる油注がれた者」とは、紀元前171年頃に殺害された大祭司オニ阿斯3世を指し、「来たるべき君主」とはセレウコス朝の王アンティオコス4世エピファネスを指すとされる7。

過去主義的（プレテリスト）解釈

プレテリズム（過去主義）は、預言が過去（praeteritus）にすでに成就したと考える。特に部分的過去主義（Partial Preterism）は、より一般的で正統的な立場であり、ダニエルの預言の大部分が紀元70年のエルサレム神殿破壊に至るまでの出来事の中で成就したと見るが、未来のキリストの再臨や最後の審判は依然として信じる4。「シャローム解釈」は、この部分的過去主義の洗練された一形態と位置づけることができる。

伝統的メシア預言解釈

この解釈は、しばしば未来主義や過去主義の枠組みと重なりつつ、69週がイエス・キリストの到来と死を正確に年代測定する預言であると強調する2。

これらの潮流を比較すると、「シャローム解釈」が単一の学派の単純な繰り返しではなく、複数の学術分野からの洞察を統合した独創的なハイブリッドであることが明らかになる。その終末論的な時間枠は過去主義に依拠し（紀元70年に成就が完結する）、中心人物である「油注がれた者」の解釈（祭司職という歴史的職務）は歴史批評学派の方法論を応用し、そしてその最も独創的な主張（祭司職の終焉）は七十人訳聖書の本文批評に依拠している。したがって、この解釈全体を支持する単一の学派を見つけることは困難であり、むしろその構成要素がそれぞれ学術的に支持可能か否かを検証することが、本報告書の中心的な課題となる。

表1：ダニエル書9章24-27節の主要解釈の比較
解釈学派
未来主義
歴史批評
過去主義
シャローム解釈

第2部：「七週」を契約更新と共同体回復の期間として

2.1. 主題的解釈：単なるカウントダウンを超えて

「シャローム解釈」の第一の柱は、「七週」を単なる時間測定の単位としてではなく、明確な神学的・歴史的内容を持つ期間として読むことにある。伝統的なメシア預言的解釈では、この49年間は62週と合わせて、特定の人物（イエス）の到来を指し示すための年代表の一部に過ぎない²。しかし、「シャローム解釈」は、この期間そのものに預言的な意味を見出す。

この解釈の鍵となるのは、ダニエル書9章25節のヘブライ語原文の読解である。「油注がれた者、君主が来るまでが七週」という句において、動詞「来る」（*בוא*, *bo*）は、必ずしも「特定の時点に到来する」という意味に限定されない¹。文脈によっては、ある状態の「出現」や「存在」そのものを示すことが可能である。この言語学的柔軟性により、「七週」は一点の出来事を指すのではなく、「油注がれた者、君主」が存在し、その指導の下でエルサレムが回復していく「期間」そのものを指していると解釈できる。つまり、「布告から、油注がれた指導者たちの時代を経て、町の回復が軌道に乗るまでが七週（49年間）」と捉えるのである¹。この解釈は、預言の焦点を「いつメシアが来るか」という予測的な問いから、「神の民の共同体はどのように回復されたのか」という歴史的・神学的な問いへと転換させる。

2.2. エズラ・ネヘミヤ記との関連：歴史的・神学的根拠

この解釈は、エズラ記とネヘミヤ記に記録されている歴史的出来事と驚くほど一致する。預言の開始点である「エルサレムを復興し、再建せよとの命令」は、多くの過去主義者や一部の未来主義者の学者によって、アルタクセルクセス王がエズラ（紀元前458/7年）またはネヘミヤ（紀元前445/4年）に与えた布告と同一視されている²。この布告から始まる約49年間（七週）は、まさにエズラとネヘミヤの指導下で行われた共同体再建の時代であった。

この再建は、単なる物理的な修復作業ではなかった。預言が「広場（*rechov*）と堀（*charuts*）が再建される」と述べる通り、ネヘミヤは城壁と市街の物理的な再建を主導した¹。しかし、それ以上に重要だったのは、共同体の霊的・社会的「シャローム」の回復であった。

- **律法の再発見と契約更新**：エズラの指導の下、民はモーセの律法を聞き、罪を悔い改め、神との契約を更新する誓いを立てた（ネヘミヤ8-10章）。これは、安息日、安息年、ささげ物など、共同体の生活全体を神の律法に沿って再編成する、霊的な再建の核心であった¹。
- **共同体の聖別と城壁奉献**：エルサレムの住民がくじで選ばれて都が聖別され、感謝と賛美のうちに城壁の奉献式が行われた（ネヘミヤ11-12章）。これは、物理的な城壁が、神を礼拝する聖なる共同体を守るためのものであることを象徴している。ネヘミヤ記12章47節が示すように、祭司やレビ人の務めが確立され、礼拝が正しく行われる体制が整えられたのである¹。

これらの出来事は、まさに「シャローム」の回復そのものであり、「七週」という期間が、共同体の歴史的・神学的な回復期として意味を持つという解釈に強力な歴史的根拠を与える。この視点は、ダニエル書9章をペルシャ時代の回復期に関する文書として読むジョン・バーグスマ (John S. Bergsma) のような学者の研究とも共鳴する¹⁹。

2.3. 捕囚後文学における「シャローム」の神学

「シャローム」 (שלום) という概念は、単に戦争がない状態を意味するのではなく、繁栄、健全さ、正義、神との正しい関係性を含む、包括的で全体的な幸福の状態を指す²⁰。捕囚後の預言者たち (ハガイ、ゼカリヤ、マラキ) やエズラ・ネヘミヤの著作において、この「シャローム」の回復は中心的なテーマであった。バビロン捕囚は、単なる政治的敗北ではなく、神との契約関係が破綻したことによる「シャローム」の完全な喪失であった。

したがって、ダニエルがエレミヤの70年の預言の成就を祈り求める文脈 (ダニエル9:1-19) で与えられた「七十週」の啓示は、まさにこの「シャローム」の回復に関する神の計画と理解するのが自然である²¹。預言の目的 (9:24) として挙げられる「咎を終らせ、罪に終りを告げ、不義をあがない、永遠の義をもたらし...」といった項目は、すべて共同体の「シャローム」が完全に回復された状態を描写している²²。この神学的レンズを通して見ると、「七週」は、捕囚によって失われた「シャローム」が、神の恵みと民の応答によって一度は回復される期間として、極めて重要な意味を持つことになる。

この解釈は、預言の力点を未来の特定の個人への予測から、過去の共同体の歴史的経験へと移す。それは、預言がその最初の聴衆であったダニエルとその同時代人たちにとって、いかに切実で意味のあるメッセージであったかを浮き彫りにする。彼らの最大の関心事は、数百年後のメシアの到来時期ではなく、目の前にある荒廃した都と共同体が、エレミヤの約束通りにどのように回復されるのか、という問いだったのである¹²。

第3部：「油注がれた者」 (マシアハ) の正体

3.1. 「マシアハ」の言語学的分析

「シャローム解釈」の第二の柱は、「油注がれた者」 (מָשִׁיחַ, *mashiach*) の正体に関するものである。この解釈を支持する学者は、まずこの単語の言語学的な意味合いを強調する。ヘブライ語聖書において、*mashiach* は固有名詞ではなく、「油を注がれた者」を意味する普通名詞 (形容詞) である。この称号は、特定の職務に聖別された人物に適用され、王 (サウルやダビデ)、祭司 (アロンとその子ら)、さらには異邦人の王キュロス (イザヤ45:1) にさえ用いられている¹⁰。

特に重要なのは、ダニエル書9章25節と26節の両方で、*mashiach* という単語が無冠詞（定冠詞の *ha-* が付いていない）で現れる点である。これは、多くの批評学者やユダヤ教学者が指摘するように、「『その』メシア」(*the Messiah*)という特定の、唯一の人物を指すのではなく、「『ある』油注がれた者」(*an anointed one*)と訳するのが文法的に最も自然であることを示唆している¹¹。この言語学的な事実は、この称号をイエス・キリストという単一のメシアに限定する伝統的なキリスト教的解釈に疑問を投げかけ、複数の人物や職務を指す可能性を開くものである。

3.2. 批評学における「二人の油注がれた者」

この言語学的分析に基づき、現代の歴史批評学の分野では、ダニエル書9章25-26節が時間的に隔たった二人の異なる「油注がれた者」に言及しているという見解が広く受け入れられている。

第一の油注がれた者（25節）：最初の「七週」の期間に関連する「油注がれた者、君主」は、捕囚帰還後の初期の指導者と見なされる。最も有力な候補は、大祭司ヨシュアとダビデ王家の末裔である総督ゼルバベルの二頭体制である。彼らの油注がれた地位は、ゼカリヤ書4章14節で彼らが「二本のオリーブの木」、すなわち「油の子ら」と呼ばれていることから示唆される⁹。この学術的見解は、「シャローム解釈」が最初の期間の指導者像として提示するものと完全に一致しており、その主張に強力な学術的裏付けを与える。

第二の油注がれた者（26節）：一方、「六十二週」の後に「断たれる」油注がれた者は、批評学者の間ではほぼ例外なく、紀元前171年頃に政敵によって殺害された大祭司オニ阿斯3世と同一視されている⁷。この解釈は、預言全体がアンティオコス4世エピファネスによる迫害（マカバイ時代）を背景に書かれたという、歴史批評学の基本的な前提に基づいている。

この「二人の油注がれた者」という解釈の存在は、「シャローム解釈」にとって極めて重要である。それは、*mashiach* という言葉がこの文脈において、（キリスト教的な意味での）単一のメシアではなく、歴史上の、特に祭司的な指導者を指しうるという学術的な共通認識が存在することを示しているからである。

3.3. 「集合的解釈」という神学的枠組み

「シャローム解釈」は、この歴史批評学の「二人の油注がれた者」という見解を、より神学的な枠組みへと昇華させる。特定の二人の個人（ヨシュアとオニ阿斯3世）を指すのではなく、「油注がれた者」という称号を、第二神殿時代の全体を通じて共同体を指導した「油注がれた指導者の職務」そのものを指す集合的な概念として捉え直すのである¹。

この解釈によれば、預言は特定の個人の運命を語っているのではなく、神の民を導くために設立された「油注ぎの制度」（祭司職と統治職）の歴史を物語っている。それはヨシュアとゼルバベルによる回復の希望に満ちた始まりから、その制度が腐敗し、最終的に機能不全に陥って「断たれる」までの、壮大な歴史的・神学的物語となる。この視点は、預言を個人の伝記から共同体の制度史へと転換させ、預言の射程をマカバイ時代という特定の危機から、第二神殿時代全体へと拡大する。これは歴史批評学の具体的な同定から一步引いた神学的な読み方であるが、その根底には「*mashiach* は歴史的な制度的指導者を指す」という、批評学と共通の洞察が存在している。

第4部：「断たれること」を祭司職と祭儀の終焉として

4.1. 本文批評の核心：マソラ本文（MT）と七十人訳（LXX）の対照

「シャローム解釈」の第三の主張、すなわち「断たれる」ことが祭司職の終焉を指すという説の根幹には、ヘブライ語のマソラ本文（MT）とギリシャ語の七十人訳聖書（LXX）との間の重要な本文異読が存在する。

マソラ本文（MT）のダニエル書9章26節：

ヘブライ語本文は以下の通りである。

וְאַחֲרֵי הַשְּׁבַעִים שָׁשִׁים וּשְׁנָיִם יָקָרֵת מָשִׁיַח וְאֵין לוֹ

(v'acharei hashavu'im shishim ushnayim yikaret mashiach v'ein lo)

直訳すると、「そしてその六十二週の後に、油注がれた者が断たれ、彼には何もない（あるいは、彼の後には誰もいない）」。末尾の「וְאֵין לוֹ」(v'ein lo) は解釈が非常に難しく、古来より多くの議論を呼んできた難解な句である28。

七十人訳聖書（LXX）のダニエル書9章26節：

一方、ギリシャ語訳聖書はこの箇所では驚くほど異なる読みを提供している。現存する主要な二つのギリシャ語版（古ギリシャ語訳[OG]とテオドシオン訳[Θ]）は、どちらも重要な点で一致している。

- **古ギリシャ語訳（OG）**：ἀποσταθήσεται χρίσμα καὶ οὐκ ἔσται (*apostathēsetai chrisma kai ouk estai*) — 「油注ぎが取り除かれ、そしてなくなるであろう」28。
- **テオドシオン訳（Θ）**：ἐξολεθρευθήσεται χρίσμα (*exolethrevthēsetai chrisma*) — 「油注ぎが滅ぼされるであろう」29。

両ギリシャ語訳に共通する最も重要な点は、ヘブライ語の「油注がれた者」(*mashiach*)を、ギリシャ語の「油注がれた者」(χριστός, *Christos*)ではなく、「油注ぎ、塗油」(χρίσμα, *chrisma*)と訳していることである。

4.2. 「クリスマ」(χρίσμα)の読みに関する学術的注解

この「*chrisma*」という訳語こそが、「シャローム解釈」の核心的な証拠となる。

「クリスマ」(χρίσμα)の分析：*chrisma* という名詞は、聖別された油そのもの、塗油という行為、あるいはそれによって授けられる職務や機能といった、非人格的な概念を指す。これは、特定の「油注がれた人物」を指す *Christos* とは明確に区別される26。したがって、七十人訳の翻訳者たちは、ここで預言されているのが個人の死ではなく、ある種の職務や儀式の終焉であると理解していた可能性が極めて高い。

直接的な学術的裏付け：この点に関して、七十人訳研究の権威であるウィリアム・アドラー（William Adler）のような学者の見解は決定的である。彼は、七十人訳の翻訳者たちが「ここでメシア的人物（messianic figure）の排除を想定していたのではなく、むしろ儀式的機能や職務（ritual function or office）の停止を想定していたことは明らかである」と結論づけている²⁹。これは、1で提示された主張に対する直接的かつ強力な学術的裏付けである。

七十人訳の解釈的選択：この翻訳は、単なる誤訳ではなく、翻訳者たちによる意図的な神学的解釈であった可能性が高い。異邦人の支配下にあったアレクサンドリアのユダヤ人共同体にとって、個人的なメシア待望を強調することは政治的に危険であったかもしれない。そのため、預言の焦点を、より制度的で非人格的な祭司職そのものの存続や終焉へと移した、という解釈が成り立つ²⁹。

4.3. 歴史的終着点：紀元70年の神殿破壊

この七十人訳の本文が示唆する「油注ぎ／儀式的機能の停止」は、過去主義（プレテリズム）が主張する歴史的成就と完璧に符合する。

「油注ぎ」によって聖別される中心的な職務は、アロン系統の大祭司職であり、その機能はエルサレム神殿における贖罪のいけにえを捧げることにあった。この祭司職とそれに伴う祭儀システムは、紀元70年にローマ軍（預言における「来たるべき君主の民」）によって第二神殿が完全に破壊されたことで、物理的かつ制度的に終焉を迎えた¹。神殿がなければ、油注がれた祭司はその最も重要な職務を果たすことができず、いけにえも捧げ物も「やめさせられる」（ダニエル9:27）。これこそが、最も文字通りの意味で「油注ぎ（*chrisma*）が断たれる」ことの歴史的成就である。

この紀元70年を預言の終着点とする解釈は、過去主義の学者たちによって広く支持されているだけでなく、4、ラビ的ユダヤ教の伝統的な解釈においても重要な位置を占めている。多くのラビは、ダニエルの七十週の預言が、第二神殿の破壊という民族的大惨事において成就したと考えてきた⁸。

このように、「シャローム解釈」は、通常は別の分野で扱われる七十人訳の本文批評とキリスト教の終末論を見事に結びつける。過去主義の歴史解釈（紀元70年の成就）が、七十人訳の特異な本文（*chrisma*）の持つ神学的含意と完全に一致することを示すことで、この解釈は独自の説得力を獲得する。それは、過去主義の歴史的主張に強力な本文的証拠を提供すると同時に、七十人訳の難解な訳語に具体的な歴史的対応物を与えることで、双方の問いに一つの首尾一貫した物語で答えるのである。

第5部：統合と結論：「シャローム解釈」の位置づけ

5.1. 構成要素に対する学術的裏付けのマッピング

本報告書の分析を統合すると、ユーザーの当初の問い、すなわち「シャローム解釈」と同様の解釈を行う研究者が存在するか、という問いに明確に答えることができる。結論として、「シャローム解釈」という名の確立された学派は存在しないものの、その三つの核心的な主張は、それぞれ異なる、時には対立さえする聖書学の分野において、有力な学術的裏付けを持っていることが明らかになった。

表2：「シャローム解釈」の核心的主張に対する学術的裏付け
核心的主張
主張1：「七週」は共同体のシャローム回復の期間である。
主張2：「油注がれた者」は集合的な指導者の職務である。
主張3：「断たれる」とは紀元70年の祭司職の終焉である。

この表が示すように、「シャローム解釈」は憶測の上に成り立っているのではなく、信頼できる学術的な糸で織られたタペストリーである。それは、単純な「はい/いいえ」の問いを、「どのように、そしてなぜ」という、より洗練された議論へと導く。

5.2. 最終評価：実行可能で統合的な少数派の見解

最終的に、「シャローム解釈」は、学術的に弁護可能で洗練された少数派の立場を代表するものと結論づけられる。それは、支配的な未来主義パラダイムや伝統的なキリスト中心の予測的解釈に挑戦するため、主流の見解ではない。

しかし、その学術的価値は決して低くない。この解釈は、以下の点においてその実行可能性を示している。

- 「七週」を、検証可能な回復期の歴史（エズラ・ネヘミヤ記）に根差している点。
- 無冠詞の *mashiach* という言語学的に健全な読みに準拠している点。
- 七十人訳における難解な *chrisma* という訳語に対して、説得力のある説明を提供している点。
- 過去主義の学派と一致する、紀元70年の出来事という歴史的に具体的な成就を提示している点。

結論として、この解釈、あるいは実質的に類似した解釈を支持する研究者は、主に部分的過去主義（Partial Preterism）の陣営や、第二神殿時代の歴史と七十人訳研究の交差点に専門性を持つ学者の中に存在する。この解釈の強みは、本文批評、歴史、神学のデータを、神のイスラエルに対する契約関係の物語、すなわち「シャローム」の回復から古い契約システムの悲劇的な終焉に至るまでの一貫した説得力のある物語へと統合する、その統合力にあると言えるだろう。